

ごし、いよいよソ連領へ入ったが、そこで待っていたのは、日本への帰国ではなく捕虜としての抑留生活だった。

今もどこの収容所だったのかよくわからないが、どこも馬小屋を改造したような粗末な所ばかりだった。初めての冬、主に白樺の伐採作業をやらされたが、気温が零下四〇度以下になると作業は待機となり、気温が少しでも上昇すると雪で真っ白な山へ出発し、ノルマを果たすまで二人一組で伐採と切断、そして運び出しの作業が続いた。何しろ凍りつく厳しい寒さの中、ちよつと作業してはすぐに焚き火を囲むことになるが、日本軍から支給された布製の外套は、焚き火の火の粉で焦げてしまうような物で、とても厳寒に耐えるような代物ではなかった。

外套は単なる防寒着ではなく作業衣でもあったが、小柄な私は、支給された外套が大き過ぎて作業中もずるずる引きずり、とても作業に適したものではなかった。どのようにして大き過ぎた外套が交換できたのか、今でははっきり覚えていないが、幸運にもソ連製の小

さいサイズの毛皮でできているシューパーが手に入り、とても大助かりだった。

そのとき、『これはソ連製なので、何かあったらすぐに返すように』と言われたが、ついに取り返しに来ることはなかった。

強制抑留の思い出

神奈川県 加藤 勇

繰上げ徴兵により昭和十九年十二月、満州新京の通信部隊に入隊。六カ月の厳しい初年兵生活を終え、延吉の通信部隊に上等兵候補教育のため転属になった。当時の戦況は、連合国側の攻勢で各地に苦戦が続き、その戦線はいよいよ本土に近づきつつあった。しかし、我々兵隊にはそんなことは知る由もなく、ひたすら軍務に励んでいた。

新兵が大勢入隊してきた。皆、我々より年長である。在満者に対する根こそぎ動員により召集された人たち

だった。かつてはそれ相当の地位にあった人たちであるうに、軍隊は未知の世界、意地悪な古兵からしこかれていた。このようなことから、ソ連との開戦も近いのではないかとだれも感ずるようになった。

予感的中したか、昭和二十年八月九日未明、中立条約を無視したソ連は、国境を越え満州国領内に各方面から侵攻して来た。非常召集と共に各陣地に布陣、敵の来襲を待つ。しかし、南方その他の戦線に精鋭部隊を抽出させられた関東軍には昔日の面影既になく、強大なソ連軍を迎え撃つ戦力はなかった。したがって我が部隊にも武器らしいものはなく、三八式小銃ぐらいが主であった。どのように戦うのか、「敵戦車に対しては地雷を背負い肉迫攻撃をかけ陣地を死守せよ」と命令が出された。そのため三人一組の肉攻班が組織された。私も新兵二人の長として地雷を背負い塹壕の中で待機した。間もなく我が身も敵戦車と共に木っ端微塵となり消え去るであろう。死とはどういうものか、もはや逃れることはできない。これが最後と親兄弟を思いつつ覚悟した。他の二人も同様であつたろうと思

う。しかし敵はいまだこない。

八月十五日正午ごろ、部隊本部より、日本は連合国側に無条件降伏し、戦争は終わったと知らされた。有史以来負けを知らなかった日本が戦に敗れたのだ。だれもかれもただ茫然としている。この先日本はどうなるのか、我々はどう扱われるのか、だれ一人知ることではない。

とうとうソ連軍が戦車を先頭に進駐して来た。戦車の上には勝ち誇ったソ連兵が自動小銃を抱えて乗っている。身近に見る戦車の大きいこと、我々が肉迫攻撃をかけてもどれほどの成果が得られたことか、思い出しでもぞつとする。牽引車に引かれた重砲等、近代武器を備えた機械化部隊が後に続く。貧弱な武器しかない我々には到底対抗し得ない。ソ連側の指示により、一切の武器を集め武装解除を受けた。

日本の敗戦により延吉の街も騒然としてきた。現地人の日本人に対する風当たりがすごい。まず将校官舎が襲われ家財は掠奪され、女性は大衆の面前で暴行されるなど、見るにたえない事件が各所に起こった。間

違った日本の植民地政策への積年の恨みを爆発させての行為であったのか。こちらは捕らわれの身、どうすることもできない。ソ連側に抗議、保護を求めたら木銃を支給され、警備に当たれたことだった。だが、刀や鎌など持った彼ら暴民の前にはどうにもならない。敗戦国民の惨めさをたっぷり味わった。

ソ連側の指示で日用品、食料品等を背負い指定の場所に集合させられた。彼らの言うには、東京ダモイとのことであった。その甘い言葉に騙され、どこに行くのか、足が棒のようになるほど歩かされた。疲労から大事な荷物を少しずつ捨てる者もいる。先行した部隊の者か、落伍者が倒れている。勿論、衣類などは暴民によりはぎ取られている。

「ダワイ、ダワイ」と馬に乗ったソ連兵から追い立てられる。名も知れない駅から有蓋貨車に押し込まれ、シベリアの地に拉致されてしまった。どこに着いたのかいまだ分からない、広野の中に立つ薄汚い兵舎の跡らしい収容所に入れられた。

板張りの二段ベッドがあるだけだった。体が痛く寝

付かれない。夜になると南京虫がぞろぞろ出て来る。その上、久しく風呂にも入っていないのでシラミが湧いてきた。皆、体中かき傷が絶えない。また、これが食事かと思えるほどの粗悪な物だった。一日分、華大の黒パンと馬鈴薯などが主で、しかも少量である。あるとき、腐れニシンが支給された。見れば蛆虫がうようよ付いている。毎日が腹ぺこ、背に腹は替えられぬと煮たり焼いたりして食べた。

こんな状態だから、たちまち痩せ衰えてきた。作業ともなれば伐採、鉄道線路工事、炭鉱などの重労働であり、体がだるく動かない。冬ともなれば零下三〇度以上にもなる寒さはさらだ。雪中の伐採作業中、倒木を避けきれず押し潰され亡くなった戦友も大勢いた。また、栄養失調による死者も数知れず。朝起きない戦友をゆすって見れば死んでいたなど、悲しい出来事が続出した。死んだ戦友の遺骸はソ連兵が馬車でどこへともなく運んで行く。鄭重に埋葬されたのか、また放棄されたのか、定かでない。来た当時の人数も二年後には半数ぐらいに減ってしまった。全く地獄のような

生活で、いつも死と隣り合わせだった。今でも時々この様子を夢に見ることがある。

昭和二十三年十一月中旬、やっと希望の日がやってきた。夢にまで見たダモイである。故国に帰れるのだ。だが、東京ダモイと騙され拉致されて来たことを思うと、一抹の不安が心の底に残る。来たとき同様、貨車に乗せられ抑留地を後にした。

列車は東に向かい数日走りナホトカに着いた。

海が見える。海の間こうは日本だ。皆、晴々とした気分になっている。ここは民主運動が盛んな所らしく、早速アクチブがアジ演説にきた。馬鹿馬鹿しいが祖国の土を踏むまではと、迎合を装い聞き入った。日本船が入港している。

足どり軽く船のタラップを上った。甲板には船員、看護婦の皆さんが「ご苦労様でした」とやさしい言葉で迎えてくれる。余りのうれしさに涙が溢れる。船は恨みのシベリア大地を後に日本海を越え舞鶴に入港した。大勢の人が肉親を求めて栈橋に詰め掛けている。生きて帰れてうれしい。思いきり祖国の大地を踏みし

めた。

「国敗れて山河あり」と、祖国の山河は我々をやさしく迎えてくれているように見える。船と舞鶴での食事の美味しさ。久しぶりに白米の御飯をたっぷり味わった。帰国手続を終え、親兄弟の待つ懐かしい我が家に戻ることができた。しかし、帰国の夢を絶たれ、今も異国の地に眠る多くの戦友たちを思うと、心休まることができない。